

幼児期の重要性

— “子どもの世界”にどう関わるか —

門山 律子

東京女子医科大学東医療センター精神科 臨床心理士主任

臨床を通して感じたこと

筆者は現在、病院で臨床を担当している。対象は主に成人で、乳幼児に直接関わることは少ない。しかし結果的に“幼児期”と向き合うことになっている。

筆者は以前に、中学校のスクールカウンセラーも経験した。そこでの臨床を通して、子ども（中学生）と大人（保護者）の在り方を考える際に困難を感じるが多かった。

彼らの親子としての歴史は13～15年。人生という長い道のりから言えば、ほんの序の口かもしれない。しかし、その時点までの歴史に関われなかったことを悔しく思い、もどかしさを何度も味わった。例えば、幼い頃から“落ち着きの無い子”でいうことを全くきかない状態を繰り返すと、本来はゆっくりと対応すれば理解できるはずの子どもに対して「あの子は何を言ってもムダなので、放っておいてるんです」という反応になってしまい、協力を得られないことがある。これは、決して子どもが可愛くないからではない。むしろ、小さい頃に一生懸命育てていたからこそ、同じことの繰り返しに困惑し、疲弊してしまったからに他ならない。この困難に対して、幼児期から助けがあれば、他の子とは違ってゆっくり話して聞かせることが有効であり、

それが親子の習慣として根付いたかもしれないのである。これと同じように、もう少し違った歴史になっていたかもしれないというケースに、幾つも出会ったのである。

これらの体験から、子育ての手助けをできるだけ引き受けよう、と心がけている。例えば「パニック障害」で通院している方がいたとする。しかし、その生活の中では“幼稚園に通う子ども”を育てていて、子育てに関する悩みは次々と起こってくる。「私のことじゃない話でもいいですか？」と子どもに関する悩みを語り始める。或いは、妊娠中に通院していた方が、出産後、今度は子育ての悩みを相談する場所として通院の継続を希望する場合もある。これらを積極的に引き受けるようにしている。直接幼児期の子どもに関わることは無くとも、結果的には“幼児期”と向き合い、その“歴史”に関わることを心がけていたいのである。

子育てという“歴史”

そのような立場で、色々な状況の人から様々な「子育ての悩み」を聴く訳だが、これらを聴いているうちに、人や場所が変わっても同じテーマが繰り返されているように感じた。

これは、学問として「ヒトの精神発達」が研究されているのだから、当然のこのよう

に思われるかもしれない。筆者もそう思うし、思っていた。しかし、話を聴くうちに「当たり前のことではないのかもしれない」と感じたのである。

ある親子のある朝の場面を想像してほしい。幼稚園か保育園に出かける前、子どもを起こし、顔を洗わせ着替えさせる。朝ごはんを食べさせる。カバンを背負わせて靴を履かせる…。この一連の流れの中で、ある“事件”が（わりと頻繁に）おこる。顔を洗うのに嫌がってぐずったり、おもちゃで遊んでご飯を食べなかったり、一人で履けるはずの靴をなかなか履こうとしなかったり、という具合である。「こんなことはどこの家でも日常茶飯事」で、特に問題にはならないのかもしれない。最後には「早くしなさい！」で済ませることができそうである。しかし、実はここに小さな問題が潜んでいることがある。そして、それに気付かずにいると、後々大きな問題へと発展する可能性があるのである。この点において、事態は「当たり前でない」状況に思えるのである。

この親子の間にある小さな問題は、小さな“ズレ”と言ってもいいかもしれない。そしてそれは“歴史”の中で、少しずつ、しかし確実に大きくなっていく。そして、後になればなるほど、その修正に時間が必要となるのである。もしも、小さなズレのうちにそれに気付き対処ができるなら、その親子の“歴史”は変えられるかもしれないのである。

それでは、親子の“歴史”において、これらの出来事はどのような意味を持っているのだろうか？その“ズレ”とは何なのか？

子どもの生きている世界

ヒトはこの世に生まれた瞬間から、ヒトとしての“世界”と対面する。もちろん母親のお腹の中にいるときから、外界との関わりは始まっている。しかし、それはあくまでも母親という“世界”を通しての関わりであろう。母体から離れ、自らの力で呼吸を始めたときから、個としての“世界”が始まる。これは、乳幼児でも個体としての“世界”がある、ということに他ならない。

ある時代には、子どもは「小さな大人」として考えられていた。つまり、少々乱暴な言い方だが、体が小さいだけで他は大人と変わらないと考えられ、大人と同じように扱われていた。しかし、それではいけない、との反省から「こども」という存在そのものを大切にしようになり、現代に至っているはずである。

これらの歴史的過程は、前述した「乳幼児の個体としての世界」の存在を認め、その世界を理解しようとする学問の発生を促した。現在でも、乳幼児の精神的あるいは身体的な発達を研究することや、その発達を助けるための教育についての研究は続けられている。個体として、個人として、“世界”を持ちながら子どもたちは存在しているのである。

このように、子どもがその世界を独自に持っていることは歴史的にも認められるところだが、実際にそれはどのように認識されているのであろうか？

大人の都合

子どもが大人と同じではない、との考えは前述した通りである。確かに、私たちが大人

として生きられるのは、それまでの体験を通して様々に学び、対応する能力や思考する力をつけてきたからである。それに比べれば、子どもたちの体験は限られたものである。そう考えれば、子どもが「できない存在」であると思うのが当然であろう。しかし、果たして何もできないのだろうか？決してそうではない。大人と「同じ」でないだけで、子どもは子どもなりの世界観から出来事を体験し、学び、思考している。

そしてこの「できない存在」という認識が、先に述べた筆者の感じた「ズレ」と「当たり前でない繰り返されるテーマ」に深く関係しているように思う。

これまで、病院や学校で“親”から聴いた子どもについての困りごとの多くは、要約すると「子どもがいうことをきかない」というものである。これはよくある“当たり前”のことである。臨床現場だけではない。普通の街中でも、例えば「早くしなさい！」とふざける子どもを怒っているような親子の光景は、いたるところで目にする。もちろん、それ（怒ること）だけで済む場合もある。しかし、先にも述べたが、それだけでは済まない事態を見聞きする。街中の親子については解らないが、少なくとも、臨床現場で聴く内容は、その背景から事象の発生までを考えると、単なる日常とは異なった側面があるのである。子どもたちの行動には、実はきちんとした“子どもなり”の理由があるように思えるのである。そして、その理由に気付けないことが、親子の気持ちの“ズレ”となっているように思う。つまり、先述のように、大人と同じようにできないということを「何もできない」と考え、「できないから手伝って欲しいの

だ」と想定し、子どもを助けるつもりで関わることがいうことをきかないと感じる。しかし、実は子どもが「できない」のではなく、やりたくない理由がそこにあってやらないだけかもしれない。例えば、大人の都合で楽しいことを中断させられたとしたら、果たしていうことをきく気になるだろうか？或いは「ママと離れたくない」と思い、わざと靴を履かないのかもしれないとしたらどうだろう。大人の都合とは違う、子どもなりの理由がそこにあるのではないだろうか？

この、自分（親）と子どもの間に“ズレ”が生じていることに気付いていない、という要素がある場合「早くしなさい！」では済まない事態となるのである。これが、筆者にとっては「当たり前でない繰り返されるテーマ」であり、この“ズレ”に気付けるかどうかのカギとなるのではないだろうか、と考えたのである。

幼児期の重要性

では、この“カギ”を手に入れるために、われわれは何ができるのか？そのために“幼児期”に何が重要で、どう大切なのか、ということを考えてみたい。

まず、“幼児期”という状態について少し検討してみよう。学問的には3歳頃から就学前までの年齢を指しており、生まれてからそれまでの家族という世界から、幼稚園・保育園などの社会性を伴った世界へと変化する時期である。家庭のルールから社会のルールへ適応しようとするプロセス、とでも言えようか。つまり“幼児期”は、社会性の発達において重要であると考えられる。

では、“社会性”とはどういうことなのか。

一般的には「社会性」と聞くと「協調性」とか「社交的な」などという言葉と同じような印象であろうか。学問的には、社会の中で期待される役割やその規範を理解し、対人関係を円滑に行える能力といったところである。ヒトとして社会の中で生きていくために欠かせない能力、と言えるだろう。

このように、“幼児期”は「ヒトが人として生きていくことの基礎を作るための時期」であり、その成長過程において最も重要な時期であると言えそうである。

そして、その時期は当然大切にされるべきであろう事は言うまでも無い。では、“大切に”にはどうすればよいのか。それは、周囲の大人がその意識を持って子どもたちと関わることである。この関わり方こそが“カギ”を手にする方法なのである。

では、具体的にはどうしたらよいのだろうか？

“思いやり”と“自己表現”

“社会性”という観点で考えようとする、やや曖昧なものになってしまう。ここで、具体的なポイントとして“思いやり”と“自己表現”を取り上げてみたい。この二点は、筆者が臨床を通じて、社会の中で求められる能力の中で最も重要な点、と感じたものである。

つまり、社会への適応と円滑な対人関係に深く関わっている能力、ということである。

では、これらの能力はどのように育つのか？ 他者を思いやる心と自己を表出すること。一見相反するように思うかもしれない。更に、親子の“ズレ”とどう関係しているのかという疑問もあるだろう。

しかし、この二つの能力の形成に必要なポ

イントは同じであると筆者は考えている。そしてそのポイントこそが“ズレ”に気付くカギなのである。

ここで、二つの能力の形成について検討してみよう。まず“思いやり”について考えてみたい。これは、他者への配慮や相手を尊重することができるか、ということになる。相手の立場に立って考える、と教えられることも多い。しかし、相手の立場に立つことは、実際には何を基準にしているだろうか？ 結局は自分の体験に基づいてはいないだろうか？ そう考えると、例えば自分が大切にされた体験が希薄であれば、他者を大切にするという発想自体が浮かびにくくはないだろうか？ だとすれば、子どもの頃からその行動や思考を大切にしてもらわなければ、思いやりが育つことは難しいと考えられる。

次に“自己表現”はどうだろうか。こちらは、自分の感情や思考を外部へ表出し伝えることである。これは恐らく、他人に流されず自分の考えをはっきり述べよ、と教えられよう。これはしばしば、自分勝手な振舞いでも、個性として自己を表現していると勘違いされている。そういう意味では“思いやり”とは相反する印象になりやすい。しかし本来は、自分を表現する能力であって「我を通す」こととは違う。むしろ“思いやり”と同時に存在しなければ意味を成さない能力ではないだろうか。そしてこれも、自分の気持ちや考えを安心して表に出すことができる、という体験をしていなければとうてい身に付かない。つまり、大人の都合によって自分の行動や思考を遮られる事無く、それらを尊重してもらえない環境がないと育たない、ということになる。

このように、どちらの能力についても、先程述べた「大人の都合によって中断される子どもの世界」と関係しているのである。つまり、子ども独自の世界（行動や思考）が無視され、大人の都合（勝手な想像）によって結果を決められることが続いたら、自分が大切にされていると感じることも、自由に自分の感情を表現することもできなくなるのである。そして、これらの能力を育てる共通のポイントとは、大人が子どもの世界を理解しようとして意識して関わっているか、つまり、子どもを取り巻く環境が、どれだけその子どもの在り方をつぶさに観察し、見守り、必要な援助を適切に与えられるかということである。大人のような合理的な考え方は「できない」が、その代わりになる行動を、小さな頭で一生懸命考え表現しようとしている、そういう“世界”に生きている、ということを周りの大人が意識して関わることこそが、小さな“ズレ”に気付き、問題を大きくしないための“カギ”なのである。

おわりに

このように「大人が子どもの“世界”をよく観ること」が、つまりは問題解決のカギな訳だが、実は子どもたちの方が、大人が考える以上に大人のことを見ているのかもしれない。子どもは、少ない体験の中から、本能的に自分の生命を守ってもらう相手として大人を観察し、その援助を引き出そうとしているのではないだろうか。これから成長し、生きていく上で必要な体験を支えてもらう、まさに死活問題である。だからこそ、“大人の都合”では動かないのである。このような視点に立って、子どもたちの“世界”を考えると

き、初めてどのような援助が適切であるのかが解るのではないだろうか。

われわれは皆、かつては「こども」だった。そのことを思い出せば“子どもの世界”を見て取る事はそう難しくないはず、と筆者は考えている。そして、できるだけ“子どもの代弁者”として、幼児期に関わる問題を援助して行きたいと思う。そして、少しでも多くの親子の“歴史”が幸せなものになるよう、願ってやまないのである。

〈参考文献〉

- 中村五六・和田實合著『幼児教育法』2007年 学校法人和田実学園
- 石谷真一著『自己と関係性の発達臨床心理学』2007年 培風館
- 東洋・大山正・詫摩武俊・藤永保著『心理用語の基礎知識』1994年 有斐閣ブックス
- 無籐隆・岡本祐子・大坪治彦編『やわらかアカデミズム・<わかる>シリーズよくわかる発達心理学 第2版』2009年 ミネルヴァ書房